

平成28年度 課程博士学位請求論文要旨

瓜子姫の成長
—その成立から現代まで—

立正大学大学院
文学研究科国文学専攻

藤井倫明

日本昔話「瓜子姫」は日本列島の広い範囲に伝播し、採話例は非常に多い。また、近世以降絵本などによって再構成されることが少なかったため、話が統一されることもなく、バリエーション豊かな伝承を保持している。

近年では海外の昔話との関係も注目され、非常に古い伝承の形を残しているのではないかと考えられている。

このように興味深い要素を多く有する昔話であり、研究者から注目されることも多い。柳田国男や関敬吾といった日本の昔話研究の中心的人物が考察を行った。だが、現在までの研究はみな単発論文ばかりであり、「瓜子姫」を体系的に考察した論文はまだない。いままで蓄積された「瓜子姫」研究を集大成し、今後の新しい研究へと進めていくことは「瓜子姫」の研究だけではなく、昔話研究にも大きな意味があると考えられる。そのため、本論では「瓜子姫」をあらゆる方面から考察・分析することを目的とする。

本論は、第一部「口承文芸としての「瓜子姫」」、第二部「再構成された「瓜子姫」」の二部で構成する。

第一部では、伝承として伝えられてきた「瓜子姫」を、採取資料を中心に考察する。

第一部は全三章で構成する。「第一章「瓜子姫」の誕生」では、「瓜子姫」という昔話がどのように成立したのかという事を考察する。先行研究をまとめた結果、「瓜子姫」の起源には海外の説話、とくに「偽の花嫁」系統の話と「ハイヌヴェレ型神話」が深く関わっているとする説が有力であると考えた。そのため、海外説話との比較を行った結果、「瓜子姫」は「ハイヌヴェレ型神話」を基礎としながらも「偽の花嫁」をはじめ様々な説話の要素が結合して成立したという結論を出した。また、「瓜子姫」で外敵の役を務めることの多い「アマノジャク」の由来についても考察した。「瓜子姫」の姫とアマノジャクは「ハイヌヴェレ神話」を元にしながらももともとは別の存在で直接の接点はなかった。しかし、姫が死なない型に変化していく際、本来は姫の役割であった、流れる血で植物の根を染めるというモチーフの担い手としてアマノジャクが「瓜子姫」に取り入れられたのではないかと結論を出した。

「第二章 モチーフ別の起源とそれに見る「瓜子姫」の地域差」では「瓜子姫」を構成する各モチーフの中でも重要と思われるものの起源と地域による違いを考察する。「瓜子姫」は多くの昔話がそうであるように、地域によってモチーフの差異が大きい。「瓜子姫」は広い範囲に伝わり、例話も多いためとくにそれが顕著である。地域ごとに「瓜子姫」がどのように語られてきたのかということ考察するとともに、それらのモチーフがどのようにして「瓜子姫」に取り入れられていったのかということ考察する。この章で取り扱うモチーフとして、「姫の生死のモチーフ」「誕生のモチーフ」「外敵の末路と血のモチーフ」「木のモチーフ」「真相発覚のモチーフ」「機織のモチーフ・嫁入りのモチーフ」「イモのモチーフ」を選択した。それぞれのモチーフの地域差をいままで採取された資料をもとに分析し、なぜそのような結果となったのか、それらのモチーフはどのような意味があるのかということ考察した。それらの結果をもとに、「瓜子姫」の日本列島における伝播と変化の経緯を整理した。「瓜子姫」は全体的に見て東北を中心とした東日本が古い型を残しており、中国地方を中心とした西日本は比較的新しい要素を多く持つ型が多いということを確認した。しかし、元となった説話が伝播した方向などを考えると「瓜子姫」が発生した

地域は西日本であると考えられる。もともと「瓜子姫」が語られていた西日本では海外との交流などで徐々に新しい要素が加わり段階的に変化していったのに対し、後から伝わった東日本では比較的古い型が残されたという結論を出した。また、「瓜子姫」の分布は全体的に見て日本海側に偏っている事、東北の日本海側、秋田・山形北部に比較的新しいと思われる木のモチーフが多く見られることなどから、「瓜子姫」は日本海を通じて伝播していったものと考察した。

「第三章 瓜子姫と関わる他の昔話との比較検討」では、「瓜子姫」と似た要素を持つ他の昔話との比較検討を試みた。とくに重視して考察した昔話が「天道さん金の鎖」と称される昔話である。この昔話は結末に血のモチーフ（流れ出した血が作物の根を染める）が挿入され、外敵の家への侵入、木での外敵とのやりとりがあるなど「瓜子姫」と共通するモチーフ・展開を持つ。また、「瓜子姫」と「天道さん金の鎖」は多く採取される地域が重ならないという特徴が見られる。「瓜子姫」が多く採取される東北や中国では「天道さん金の鎖」の採話例は少なく、逆に「瓜子姫」が少ない九州では「天道さん金の鎖」が多く採取される。そのことから、このふたつの昔話は起源を同じくし、伝播の過程でもなんらかの接触があると考えたが、結論を出すことまではできなかった。

第二部では、特定の作家により児童向けの読み物として再構成された「瓜子姫」を中心に考察する。

第二部は全四章で構成する。「第一章 アンケート結果に見る現代の瓜子姫への認識」では、現代において「瓜子姫」という昔話がどのように認識されているのかということ客観的に知るために行ったアンケート結果とその分析を行う。分析の結果、「瓜子姫」の知名度は題名だけを知っているという回答を含めても3割強であった。また、「瓜子姫」を知っていると答えた回答者にいつ、どのような媒体で知ったのかという質問をしたところ、就学以前から小学生のときにかけて、絵本などの児童書で知ったという回答がもっとも多かった。これらの結果から、「瓜子姫」は現代では決して高い知名度があるとはいえず、すでに「聞く昔話」から「読む昔話」に変わりつつあるということが確認できた。

「第二章 近代以前の文字に残る「瓜子姫」」では、近代以前に文章として残っている「瓜子姫」の再構成作品について考察を加える。近代以前で確認できる数少ない「瓜子姫」の再構成作品として御伽草子『瓜姫物語』と柳亭種彦『昔話きちちゃんとなんたん』を取り上げる。これらの作品の特徴を当時の「瓜子姫」がどのようなものであったのかということも含めて考察する。「瓜子姫」は江戸時代に絵本として発行された例はほとんどなく、それが近代以降、再構成作品があまり作られなかった要因であると結論を出した。

「第三章 近代以降の児童向け「瓜子姫」」では、近代以降、児童向けとして再構成された「瓜子姫」がどのようなものであり、どのように読まれたのかということを中心に考察する。まず、「瓜子姫」再構成作品の流れをまとめた。その結果、近代以降の「瓜子姫」再構成作品は口承文芸としての資料を参考にするのではなく、一度再構成された作品をもとにして、新たに再構成を加えるという流れがあることを確認できた。とくに高野辰之・楠山正雄らが再構成した作品の流れを汲むものと、関敬吾・坪田譲治・松谷みよ子らが再構成した作品の流れを汲むものが「瓜子姫」再構成作品の中で大きな位置を占めているということがわかった。そのため、これらの作品がどのようなものであったのかということをもとにひとつずつ考察した。また、それ以外にも幅広く読まれたものとし

て柳田国男と木下順二の再構成作品の考察も行った。また、近代以降、挿絵などによって描かれた「瓜子姫」についても考察を行った。初期には姫がおとなの女性、アマノジャクは恐ろしい怪物として描かれていたものの、時代が進むにつれ姫は子供に、アマノジャクは子鬼として描かれるように変化していったということが確認できた。また、近年では様々なジャンルの作品をひとつにまとめたアンソロジー作品集とも言うべき媒体の書籍が多く発行され、「瓜子姫」も収録されることがある。今後、アンソロジー作品集によって「瓜子姫」が読まれていく可能性が考えられる。

「第四章 忘れられた「瓜子姫」」では、後世の再構成作品の原典とされることもなく、作品そのものも読まれることがほとんどなくなった「瓜子姫」再構成作品に光を当て、忘れられた作品を掘り起こすことに挑戦した。おもに民俗学者や作家として有名な人物の作品でありながら顧みられることのなくなった作品を中心に考察した。取り上げる作品の作者として、石井研堂、藤澤衛彦、浜田広介、平林英子を選んだ。この中では平林英子だけは再構成作品のみならず一般的な知名度も低い。ただ経歴や作風などが興味深く光を当ててみたいと考えたこと、その再構成作品も学習誌の付録として長い間読まれているという特殊な事情があることなどを考慮し、今回考察を加えた。

「瓜子姫」再構成作品を考察した結果、絵本の総数は少ないということがわかった。「瓜子姫」は女の子が外敵に着物を奪われて木に縛られる、など現代の倫理感から見るとやや子供にはふさわしくないと思われる描写が含まれ、とくにそれは絵によって視覚化すると顕著である。そのため、絵本化には向かない昔話であると言える。聞く昔話から読む昔話、さらに見る昔話に変化していく段階で、だんだんと時代に合わなくなってきたとも言える。現代の昔話は児童書、とくに絵本で読まれることが非常におおいため、絵本に向かないということは「瓜子姫」がこのまま忘れられてしまう可能性もありつつのではないかと危惧する。今回の研究でわかったように、「瓜子姫」は海外と日本列島との繋がりを示し、各地域の文化や伝統を保持する貴重な資料でもある。長年語り継がれてきた昔話が時代の流れによって消えてしまうことは残念であるため、今後、「瓜子姫」の再構成作品はどのようにあるべきかということも含めて今後も研究を進めていきたいと考える。